

教師を育てた 言葉たち

No.004

愛媛県・私立聖カタリナ学園高校 中本幸太先生

なかもと・こうた

◎教職歴13年。同校に赴任して14年目。3学年担任。地歴・公民科教科主任。

聖カタリナ学園高校 全日制／普通科・総合学科・看護科・看護科専攻科／共学(2015年度まで女子校)／全校生徒1353人／2017年度入試合格実績(現役のみ)：国公立大は、広島大、愛媛大、長崎大に3人が合格。私立大は、中央大、法政大、立命館大、関西大、松山大などに延べ218人が合格。



教 職2年目に初めて担任を持つことになり、自分らしさを出そうと、毎朝、黒板に生徒へのメッセージを書くことにしました。「おはよう」に始まり、よいことを褒めたり、気になることを注意したり、連絡事項を伝えたりと、生徒とのコミュニケーションツールの1つになればと考えたのです。しかし、数か月すると、毎日書くことに意味を見いだせなくなっていました。例えば、「静かにしよう」と書くと、その日は改善されましたが、翌朝書いていなければ元通りという状態で、自分が何を言っても生徒には伝わらないのではないかと悩みました。

そんなある日、職員室で作業をしていた私の隣に、担任クラスの数学科担当の先輩先生が座られました。私は「うちのクラスの生徒がご迷惑をかけていませんか」と相談し、「メッセージをやめようかと悩んでいる」と打ち明けました。すると即座に、「**誰か1人は見ているんじゃない？ その生徒のために続けたら**」と言われたのです。「ルールを守らない生徒に目が行きがちになるけれど、きちんとしている生徒こそ意識して見ていかないと」という言葉に、はっとさせられました。

そ の後すぐ、先輩先生の言葉を実感する出来事がありました。私がやむを得ず学校を2日間休んだ翌日、生徒から「メッセージがなかったから、先生に何かあったんだと思いました」と言われたのです。「見ている生徒はいる。だから、何があっても続けよう」と、私は決意しました。

一人ひとりと向き合う大切さも、生徒に教えられ

ました。担任2年目、遅刻欠席がなく、授業態度も真面目な生徒から「私が頑張っても、先生は褒めてくれない」と言われたのです。また、数年前には、私の発言が思わぬ生徒の誤解を招き、そこから生徒たちとの関係がうまくいけなくなり、黒板のメッセージが数回消されるようなこともありました。

私は、クラス「全体」をよくしたいと思うあまり、目立つ生徒のことばかりを気にかけていました。しかし、「個」を大事にしなければ、全体がうまくいくはずはないのです。一人ひとり違った人間が集まるのがクラスで、同じ言葉でも受け止め方は様々です。そして、生徒は教師の言動を想像以上に見聞きして、喜びや悲しみを感じています。生徒との接し方には正解がないからこそ、これでよいのかと悩みながらも、生徒の表情や発言、行動にきちんと目を向け、気になったことは後回しにせず、すぐに行動に移すことを意識するようになりました。

14 年目の今も、毎日欠かさず黒板にメッセージを書き続けています。卒業生やクラス替えとなった生徒から「メッセージ、毎日見てました」と言われる時、改めて1人の存在に気づけます。

書く内容は、今も変わりません。でも、伝えたい生徒を思い浮かべながら、全体に向けた言葉にしています。「個」をよく知れば、クラス「全体」に投げかける言葉も自然と変わっていきます。そうすれば、「個」も影響を受けて、「全体」のことを考えて行動してくれるようになる。そう信じて、これからも一人ひとりと向き合っていきたいと思います。